

# マーガレット・フラーの反カトリック思想

## —イタリアの独立・統一と教皇ピウスIX世—

上野和子

Margaret Fuller's Anti-Catholicism:  
Italian-Risorgimento and Pope Pius IX

Kazuko Ueno

Margaret Fuller, a leader of various movements toward liberalism, stayed in Rome from 1847 to 1850. Supporting the unification and independence of Italian principalities, she strongly backed the revolutionary Roman Republic government and opposed the Jesuits in their conventional political system. Consequently she was to encourage the revolutionary campaign for exiles at home, offending Bishop Hughes of New York City Catholic diocese.

Here I would like to clarify the process of her understanding of Italian affairs toward 1848-9 revolutionary movement and her negative attitude to both Pius IX and Italian Catholicism. This reveals that Fuller, being a member of the Transcendental Club, was a radically individualistic and staunch republican, though ethically Puritan. Observing the relationship between the pope and his people and the various rites and rituals of Catholic society, she became aware of what she called 'the cancer of society', the Jesuits. Having become despondent because of the failure of 1849 revolution in Italy, she earnestly hoped that a republican Italy would be born again.

### はじめに

マーガレット・フラー (Margaret Fuller 1810-1850) は19世紀中葉、超絶主義クラブで活躍し自由主義運動に貢献したジャーナリストのひとりであった。アメリカの女性として初めて『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙の特派員となり、1848年ヨーロッパ全土を揺るがした革命の頻発、産業革命による新興都市の実態などを特派員報告にまとめた。フラーは、1847年3月から1850年までイタリアに滞在した。当時小国分立していたイタリアでは、ウィーン体制後、オーストリアやフランス占領下の地域や封建専制小国家において秘密結社「カルボナリ」、ジョゼッペ・マッツィーニ (Giuseppe Mazzini 1806-1872) 創設の「青年イタリア」等の革命運動が台頭していた。教皇ピウス9世 (Pius 9 在位1846-1878) は、ミラノのタバコー揆、パレルモの反乱、ウィーン蜂起など内憂外患の

処理に失敗し、ナポリ王の庇護でガエータへ逃亡を図った。その直後マッツィーニがローマ共和国を樹立したが、ナポレオン3世に攻略されて5か月も持続しなかった。フラーは、アメリカの読者に建国の精神を喚起してイタリア支援を呼びかけ、攻囲されたローマからフランス軍との戦闘記事を送り続けて、ジャーナリストの地位を確立した。

この間フラーは、教皇やイタリアのカトリック教社会に対して批判を強めていったが、それはプロテスタント精神に基づいたフラーの共和主義思想が、イタリアの近代化を求めたからであった。本稿では、自由主義的なフラーの、ピウス9世に対する期待と挫折、カトリック社会批判の道筋をたどる。

## 1. フラーのピューリタニズム

フラーの宗教観を見る上で、参考になると思われる出自の記録がある。伝記『ロマン派的人生・マーガレット・フラー』（1992）を書いたチャールズ・キャパーによれば、彼女の祖先はイギリス出身の勇猛果敢で宗教心の強い人々であった。アメリカ第一世代のトーマス・フラーは、子供に聖書のなかのたくましい人物、ルツ、ハンナ、ヤコブ、ヨセフのような名前をつけた。フラーの祖父ティモシーは王党派の議員であったが、サンドウィッチ町の名牧師エイブラハム・ウィリアムの娘セアラと結婚した。祖父のティモシーは大農場を経営し、息子たちをみな大学へやり弁護士にした。フラーの家族は、宗教的にはユニテリアン教会の影響を受け、政治的には共和主義的で、気質としては貴族的な気分を受け継いだ。それは「宗教的というよりは倫理的、倫理的というよりは世俗的で、そのどちらも独特なものであり、しかも遅咲きであった」（Capper 1992: 3）。

フラーのピューリタニズムの解釈はそのまま彼女の精神的な成長を表している。若いフラーは自由で楽天的で、合理主義的性向があった。20歳の時従兄弟のフレデリック・デイヴィスに当てた手紙を見ると、フラーは宗教を心の避難所とか、庇護してくれるものとして考えていない。しかし、「永遠の前進」「神」「美」「完全性」を信じ、その信念で生活を律するべきであるとし、「啓示」を経験してないが、そんな情感を培う必要もないと考えていた（Capper 1992: 103）。

フラーは多くの友人と交際していたものの、男性との愛情に発展することはなかった。フレデリック・デイヴィスや、その後ユニテリアン牧師で活躍するジェームズ・フリーマン・クラーク（James Freeman Clark 1810-1888）と知的に交友を続けるが、彼女の恋はいずれも実を結ばない。デイヴィスとの別れは、フラーに精神的にも肉体的にも意義深い影響を与え、神の大きな存在を認めることになった。

It was Thanksgiving day,... Suddenly the sun shone out with that transparent sweetness, like the last smile of a dying lover,... I sow new and immortal plants in the garden of God,... I saw there was no self; that selfishness was all folly, and the result of circumstance, that it was only because I thought self

real that I suffered, that I had only to live in the idea of the ALL, and all was mine. This truth came to me, and I received it unhesitatingly; so that I was for the hour taken up into God. In that true ray most of the relations of earth seemed mere films, phenomena. (Fuller 1852: 139-41)

それは、感謝祭の日であった。…突然太陽が、死にゆく恋人の微笑のように、優しく澄んだ光で輝いた…私は神の庭に新しく永遠の樹木を植えた。…どこにも私という自我はなかったし、今までの自己主張はすべて愚行であった。その結果私が苦しんだのは現実に生きる自我であると感じた。今までのすべてのことは利己的な悩みであった。私はただ全宇宙という概念の中に生きなければならなかった。そしてそのすべてもまた私自身のものだ。この真理を理解した時、私はそれをためらうことなく受け入れ、しばし神の中に自分をゆだねた。あの真理の光の中では、地上の関係の大部分は、単なる薄い膜でしかなく、外象にすぎない。

フラーは、デイヴィスとの傷口が癒えたのであろうか？また、父親との完全な親子関係の絆からの脱却あるいは独立であったのか？少なくともこの時の宗教的認識は、フラーにとって重要であった。宗教的な教義を偏向させたわけではなかったが、この「覚醒」はフラーにある直感的な信仰心を認めさせたこと、哲学的に取りくむ必要性を促したことである。それは、フラーの自己放棄ではなく、自己の超越であった。

## 2. 超絶主義クラブ

フラーは1839年から超絶主義クラブと関り、1840年から1842年まで機関紙『ダイアル』の編集にあたった。本来超絶主義は「宗教的示威運動」であり、超絶主義者によれば、ルソー以来のロマン主義のように、人間の精神と自然はお互いに照射し合うのである。必然的にその結論は、自然そのものが尊厳を持つ聖なる対象であり、男も女も神に似た存在であるという疑似的な信仰心であった。初めは個人的なユニテリアン牧師の集まりであった超絶主義クラブは、1838年7月のエマソン (Ralph Waldo Emerson 1803-1882) の「神学部講義」(*The Divinity School Address*) に対するハーバード大学教授アンドリュー・ノートン (Andrew Norton 1786-1853) やフランシス・ボウエン (Francis Boen) 等保守派の激しい非難によって、かえって有名になった。エマソンは、未だユニテリアン牧師の大半が信仰しているイエスの神性を含む「歴史的なキリスト教の残滓」を痛烈に攻撃し、彼らを「形式主義者、亡霊のような牧師たち」と非難し、「魂の法則による…直観」が信仰の核心であると説いた。

超絶主義者の活動は、体制側に対する対抗文化運動でもあった。独学で博識のユニテリアン牧師のオレステス・ブラウンソン (Orestes A. Brownson 1803-76) は、『ボストン・クォーターリー・レビュー』誌を創刊し、「客観的」超絶主義を提唱し、民主的政治哲学を

披露した。この秋に、ジョージ・リプレイ<sup>1</sup> (George Ripley 1802-80) が、『世界文学全集』の始めの2巻を出版した。翌年、1839年の春には、この全集にフラーによるエッカーマン著『ゲーテとの対話』の翻訳 (*Eckerman's Conversation with Goethe*) が入った。ドイツのロマン主義やポスト・カント哲学を讃美する彼らは、アメリカ文学のコスモポリタニズムを謳歌することになった。ノートンとリプレイの論争は、イエスの奇跡についての解釈ではあったが、旧弊な「学者」や排他的な知識層に対する不満の現れであった。彼らの自由主義精神は、超絶主義者クラブの構成員の変化が物語っている。元来、クラブの創立者にはボストン・ブラーミン<sup>2</sup>でないものも含まれていたが、大抵はこれらの出身者たちであった。しかし1830年頃になると、新会員は、牧師で農場経営者の息子セオドア・パーカー (Theodore Parker)、詩人で船長の息子ジョーンズ・ヴェリー (Jones Very)、社会運動家で鉛筆製造業者の息子ヘンリー・ディヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau 1817-1862) 等ほとんどがブラーミンとは無縁の人間であった。

東部における精神風土の影響も強かった。保守的な禁酒運動や教育普及活動に加えて、福音主義的な信仰復興運動の高まりの中、奴隷制廃止運動、骨相学、食事の改善、無抵抗主義、共同実験農場などの運動が展開された。超絶主義者がこれらの運動に共感を示したのは驚くことではない。ジョージ・リプレイは、貧困層の知的能力を高めるために、良識ある人々に訴えるという古代ローマの貴族的な信念をもち、エマソン、オルコット (Amos Bronson Alcott 1799-1888)、ブラウソンなどは、新しい哲学からプロト民主主義な結論を引き出した。つまり、個人の保持する神性や魂を解放する必要性、そして思考と行動、知識層と一般人の有機的な生活の融和という概念はみな、既成社会に対する過激な超絶主義の傾向を示していた。もとより、男性以上に厳格な教育を父親から受けたフラーが、女性であるが為により過激な社会意識を持っていたとしても不思議ではない。

超絶主義に関してフラーは、エマソンやオルコットに会った時から、それほど変わってはいないようである。系統的な哲学を確立する必要性を感じていなかったし、プラトンやコールリッジ、ポスト・カント哲学派に接してはいたとしても、フラーはドイツロマン派に啓発され、主観的審美主義の世界に遊んでいた。ティークやノヴァリスのロマン主義を独習で理解し、深い憧憬を抱いていた。むしろフラーの宗教的な見解は、多くの超絶主義者たち同様、主に宗教体験を主観的な基準で受け入れるものであった。その最たる例は、ニューヨークのユニテリアン牧師オーヴィル・デュウイの説教を聞いたとチャニング (William Ellery Channing 1780-1842)<sup>3</sup> に宛てた手紙に顕われている。

1 ジョージ・リプレイ 超絶主義クラブの会員、共同実験農場ブルックファーム創設の中心人物、フラーの後任として『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙の書評欄を担当した。

2 ブラーミン ニューイングランド地方の名門出身で、保守的な知識階層を指す。通常、その高慢で排他的な態度が非難的となってきた。

3 ウィリアム・エラリー・チャニング ユニテリアン派の指導的な牧師、人間主義の立場から文

As he began by reading the first chapter 9 of Isaiah ... I made mental comments with pure delight... Then pealed the organ, full of solemn assurance. But straightway uprose the preacher to deny mysteries, to deny the second birth, to deny influx, and to renounce the sovereign gift of insight, for the sake of what he deemed a "rational" exercise of will. As he spoke I could not choose but deny him all through, and could scarce refrain from rising to expound, in the light of my own faith, the words of those wiser Jews which had been read. (Fuller Paper Oct.25, 1840)

彼がイザヤ書の第9章を読み始めた時…私は純粋な喜びを感じながらそれを考えていた…まもなく力強く荘厳なオルガンの調べが響き渡った。しかし直ちにその説教師は立ち上がると、彼が＜合理的な＞意思の行使であると考えたもののために、イエスの奇跡を否定し、復活を否定し、光来<sup>4</sup>を否定し、神による最高の賜物である洞察力を否定した。説教の間、私はずっと彼の言葉に反対せざるを得ず、自分自身の信仰に基づいて、聖書に書かれたユダヤの賢者たちの言葉を解釈せずにはいられなかった。

フラーの主な宗教的な関心は厳密な意味では神学的ではない。1839年、1840年のフラーが書いた記事は、チャニングの言葉どおり＜ニューイングランドにおける超絶主義運動の夜明け＞であるが、フラーが超絶主義運動を、新しい神学や教会の誕生と捉えていたわけではなく、文化的な覚醒の気運として考えていたことを示している。

### 3. ローマ教皇ピウス9世の改革とアメリカのイタリア支援運動

フラーは、クエーカー教徒のスプリング夫妻と共に、1847年3月マルセイユからジェノアへ、そしてナポリ、カプリ、もちろんヴェスヴィオス山を見学し、ローマ入りした。途中、ジェノアでは、ロンドン亡命中の革命家マッソーニの手紙を母親に届けている (Fuller 1991: 130)。当初、フラーのローマ教皇ピウス9世に対する印象は悪くなかった。1847年5月フラーは、その前年選出されたピウス9世が、民主的な融和策のために民衆の期待を集めていることを報じた。教皇は、1846年6月16日、政治亡命者や政治犯約一千人に恩赦を与え、組織の改革に乗り出した。1847年3月、出版物に対する検閲制度を緩和し、4月には、各地の平信徒を含む コンスルター・ディ・スタート 国政審議会を創設し、6月には グワルディア・チーヴィカ 市民警備隊を組織し、12月には内閣協議会を発足させた。フラーの記事によれば、国政審議会の創設を発表した夜、民衆はたいまつを手に波波ロ広場からコルソ通りをとおり、クイリナル宮殿に歓

化運動を展開し、奴隷制廃止運動、反戦同盟を組織、説教 *Unitarian Christianity Most Favorable to Piety* (1926) が超絶主義への道を開いたとされる。

4 光来 原文は influx。神の光が自我の中に入ってくる体験をいう。

呼の声を響かせた。バルコニーから教皇は民衆に応えて両手を広げ、民衆はひざまずいて彼の祝福を受けた。また、ローマ市創立記念日に教皇主催による午餐会が、初めての試みとしてタイタス浴場で行われた。スプリング夫妻とフラーはマッツィーニの友人から切符をもらい午餐会に出席した（Mehren 1994: 254）が、この催しは教皇の行く末を暗示するように、怪しげな雲行きで終わった。午餐会の席上、イタリアの革命家で詩人マンゾーニの婿であるアゼルジオ侯爵は、演説の中で暗にオーストリア皇帝を非難するような詩句を使った。報道記事の原稿を見たオーストリア大使はあわててそれを没収したが、この話は既に聞いてしまった人から広まっていった。そのため、聖名祝日に予定した教皇主催の午餐会は取りやめとなった。

1847年の夏、フラーはローマを離れてアッシジの丘に登り、聖フランチェスカの絵を見てシェリーやバイロンを思い出し、ペルージャの町ではエトルリアの墓地を訪ずれ、フロレンスの芸術に感動する。ヴェニスではかつての大富豪の館に、当時のヨーロッパの名士たちが、例えばフランスのベリー公爵や、ボルドー伯爵が別邸として、大運河の瀟洒な宮殿を構えているとか、イタリアのバレリーナ兼振付師のマダム・タリオーネが有名な「黄金の館」を購入したことが伝えられた。その後フラーは、ヴェローナ、マンチュア、ラゴディ・ガルダ、ブレチアを経てミラノを訪れている。

しかしながらイタリアの不穏な政情が、まもなくフラーを苛むことになる。1847年7月オーストリアのスパイ容疑者がフェラーラで暗殺された。メッテルニヒの差し金によりラデツキー将軍は、この機に乗じて教皇領下のフェラーラに駐屯部隊を増強し、ウィーン条約で認められていた要塞の保持だけでなく、市全体を占領してしまった。フラーは、イタリア各地でオーストリア支配に対する怨嗟の声を耳にする。1847年8月9日の記事では「貴族たちは、侵入者に対してはよそよそしい態度で接している。中流階級の間では、もっとも改革の気運が高まっているのだが、現在の政治組織ではそれが見えてこない。しかし、機が熟せばロンバルディアの血は燃え上がるだろう。下層階級は無知ゆえに無自覚で、検閲が集会や言論の自由を奪っているため、彼らを指導し教授することが出来ない」と述べた。こんな状況をフラーは、イタリアの＜受け身の愛国主義＞と名づけた。しかし、オーストリアのフェラーラ占領に関して教皇ピウス9世は強く反撥し、オーストリア皇帝の破門をおわせながら、軍の撤退を要求した。教皇の態度はイタリア人の反オーストリア感情を強く燃え上がらせる結果となった。

ここで当時のイタリアの近代化に目を向けてみよう。イタリア半島は、19世紀の初め、先進的な北部イタリアと停滞的な南部イタリアとの大きな格差をとめないながらも、総じて経済は進展を見せた。もちろん西欧諸国に比べれば、その進展ははるかに緩慢であった。それでも1830年代から1840年代にかけて、ロンバルディアやピエモンテ、リグーリアなどに絹の製糸工業を代表的なものとして資本主義的な近代産業の成長がみられた。それとともに、産業ブルジョワジーの成長もあり、開明的な貴族を交えた彼らの主張が社会に聞かれ始めた。先進諸国にならって、近代的な政策を導入し、産業の振興を図ること、わけて

も鉄道や蒸気船の導入、金融事業の整備、道路・港湾の改修、農業の改良、あるいはイタリア半島を結ぶ国内市場の育成などが、進歩的貴族および上層市民の関心を次第に集め始めた。同時に科学知識の普及や教育の振興、方言の排除などを目的とし、機関紙『アントロジーア』誌や『コンチリアトール』誌が廃刊された後も、『科学・文学・美術の進歩』誌、＜農業研究者アカデミー＞の機関紙などが創刊され、1839年ピサでは第一回イタリア科学者会議が開催されている。同年、鉄道がナポリーポールティチ間、翌年ミラノーモンツァ間に開通されたのをはじめ、各地に敷設され始めたが、それは、まさに＜イタリア半島を縫い合わす＞役割を果たし、イタリア人の連帯感の育成に大きく貢献した。また、ロマン主義文芸の交流の中で、多くの詩人や作家の作品が民族の独立とイタリアの復興を期待させ、特にオペラでは、ベッリーニ、ロッシーニ、ドニゼッティ、ヴェルディが人々に社会意識の自覚を促していた。

1847年10月頃までフラーは、教皇とイタリア人との関係を父と子のように表現しているものの (Fuller 1991: 155)、徐々にイタリア問題の深刻さを報じ始める。この頃はまだ、独立や統一についてイタリア人の意見もまちまちであった。第一に「穏健派」と言われる、北部イタリア、ロンバルディア、ヴェネチアなどに支持者たちを持つ、サルディニア王国の自由主義的な貴族やブルジョワジーたちがいた。『イタリアの希望』(1844)を著したセザール・バルボ (Cesare Balbo)、『ロマーニャにおける最近の諸事情』(1846)を著したマッシモ・ダゼーリオ (Massimo Tapaerelli D'Azeglio) がイタリアの近代化を叫んだ。第二は、ミラノ等主要都市の商工業者、中産市民、職人階層で、彼らは政治的統一よりも経済的な統一を先に望み、イタリア諸邦君主の協力に期待して立憲君主制を主張した。第三に、国民主権と共和主義国家の建設を標榜するマッツォーニとその信奉者、『イタリア人の道徳的・文化的優越』(Del primato morale e civile degli Italiani 1843)において、教皇を頂いたままの連邦制を主張するヴィンチェンツォ・ジョベルティ (Vincenzo Gioberti 1801-1852) などがいる。

フラーは、イタリアにおける共和制の樹立と教皇庁の廃止を期待しているが、現状ではかなりの難題であると認識している。当時の教皇、サルディニア王、モデナ侯爵やナポリ王等の封建領主の反動政治は冷酷かつ旧弊であり、民意も低かった。

The task undertaken by the pope seemed to present insuperable difficulties. It is never easy to put new wine into old bottles and our age is one where all things tend to a great crisis, not merely to revolution but to radical reform. From the people themselves the help must come, and not from princes: ... Rome, to resume her glory, must cease to be an ecclesiastical Capital; Although I sympathized warmly with the warm love of the people, the adulation of leading writers, who were so willing to take all from the hand of the prince, of the Church, as a gift and a bounty instead of implying

steadily that it was the right of the people, was very repulsive to me.

(the underlined part by the author)

(Fuller 1991: 156)

教皇の始めた任務は克服できない難しさを呈しているように思われる。古い皮袋に新しいぶどう酒を入れるのは決してたやすいことではない。われわれの時代には、すべてものがただ革命へ向かうだけでなく、過激な改革を伴う大きな危機に陥りやすい。その危機を救うのは封建君主でなく、人民でなければならない。…ローマは栄光を回復するために、聖職者の首都であることを辞さねばならない。…もちろん私は、(教皇への) 人民の温かい愛情に共感するが、本来人民の権利であるものを断固として示す代わりに、すべてのものを取り上げ君主や教会からの賜り物、施し物とする高名な著述家たちのへつらいに嫌悪感を覚える。

(括弧、下線部は筆者による)

フラーの記事に呼応して本国アメリカでも、イタリア支援運動が展開された。1847年11月29日『トリビューン』紙の主幹ホレス・グリーリー (Horace Greeley) が、教皇への声明文発起委員会の議長として、イタリア問題をアメリカの独立に擬え、演説している。

We unite in this tribute, not as Catholics, which some of us are while greater number are not, but as republicans and lovers of Constitutional Freedom. Recent as is our national origin, wide as is the ocean which separate our beloved land from your sunny clime, we know well what Italy was in the proud days of her unity, freedom and glory-what she has since been while degraded by foreign rule and internal dissension-we have faith that lofty and benignant destiny awaits her when her people shall again be united, independent, and free.

(Fuller 1991: 184)

この献辞において、カトリック教徒が大多数ではなく少数派ではあるわれわれは、カトリック教徒としてではなく、共和制支持者として憲法における自由の擁護者として結束する。わが国の起源は新しく、わが愛する国とあなた方の日の照る地方を隔てる大洋は滔々<sup>とうとう</sup>と流れているが、われわれはイタリアが統一、自由、そして栄光を誇った日々——それ以来外国支配と国内紛争により疲弊したこともよく理解している——われわれは、高潔で恵み深い運命がイタリアを待ち受けていることに確信するが、その時イタリア人民は再び結束し、独立し、そして自由を手にするであろう。

アメリカの支援運動はともかく、フラーは1847年12月17日に、教皇の意思が「改革では



なく改善であって、セント・ピーター寺院が安全に施錠されることを望み現状維持である」と伝え、教皇を迎える民衆の数が昨年より少なく人気に翳りが出たことも報道した。

#### 4. フラーのカトリック社会批判

この年、1847年の大晦日、ピウス9世や教皇庁に対するフラーの怒りは爆発した。フラーは、ローマや他の街のあらゆる場面でイタリア社会を抑圧している、ジェスイット派や王侯貴族の専制政治に不快感を著し、盲従する庶民に対しても苛立ちを示している。フラーにとって、教皇の執り行う儀式は、人間性に対する侮辱であり、貴族の女性が一生独身生活を余儀なくされる修道院制度は、非人間であると感じられた。

半ば異国情緒異に憧れ、王侯貴族のきらびやかな儀式や衣装に目を奪われてはいるが、フラーはその虚飾や偽善を決して見逃さない。高位聖職者の連なる儀式を初めは風雅なものとして表現していたフラーは、次第に苦々しさを感じる。多くの外国人ならば、ものめずらしそうに見る儀式に、フラーはその形式と本質を結合させる。

This morning I went to the Quirinal Palace to see the Pope receive the new municipal officers. He was today in his robes of white and gold, with his usual corps of attendants in pure red and white, violet and white. The new officers were in black velvet dresses with broad white collars. They took the oaths of office and then actually kissed his foot. I had supposed this was never really done, but only a very low obeisance made; the act seemed to me disgustingly abject. A Heavenly Father does not want his children at his feet, but in his arms, on a level with his heart. (Fuller 1991: 184)

今朝、私はクィリナル宮殿に行き教皇による官吏の就任式を見学した。教皇は白と金色の礼服をまとい、通常の如く真紅と白、紫と白という縞柄の制服をつけた近衛兵に伴われていた。新官たちは広い白襟に黒のヴェルヴェットという職服を身に包んでいたが、就任の宣誓をした後、驚いたことに、実際に教皇の足元に接吻したのであった。卑しい服従を表す以外、このような行為は決してなされないだろうと思っていたので、私はその仕草を極めて卑屈だと感じた。天なる父は自らの子等が足元に膝まずくのをやめしめないであろう。せいぜい肩の辺りに、胸と同じ高さでよいではないか。

ここには、エマスンが1832年、ボストン第二教会を辞職した理由とまさに同様の精神が働いている。エマスンは、聖餐式の際牧師が信徒にパンとワインを授けるという儀式に、違和感を捨てることができなかった。この儀式の重要性を確信し、丁重に儀式を執り行う牧師は大勢いたであろう。実際そのような人々からエマソンは、牧師職の責任を回避する

ものと謗られた。もちろん、その違和感の根拠についてエマソンは、教会の形式主義へ攻撃、ユダヤ社会の過越しの祝宴という歴史主義の解釈、そして魂の束縛を促進する外的権威の拒否などを明白に述べている。しかし、そうした議論をぬきにしても、エマソンが牧師として人と向きあう儀式の際に感じたであろう、居心地の悪さを理解することはできる。

フラーもエマソンも、位階制度を役割としてしか理解しなかった。位階制度は彼ら超絶主義者にとって、人間の尊厳の上下を意味するものではなかった。ソローも同様に、評論「市民の反抗」(‘Civil Disobedience’ 1849) で政府機関や政府も、政府の常設軍も「便宜上」(expediency) のために、必要であると説いている (Thoreau 1966: 224)。独立戦争後、半世紀たった東部の知識人たちは堂々と、民主的平等主義を推し進めることになった。確かにアメリカには、小説家ヘンリー・ジェイムズ (Henry James 1834-1916) の感じるとおり、「壮麗たる寺院も国会議事堂もない。そしてそこに巢食う幽霊さえもいなかった」。しかし、再三フラーがアメリカの読者を喚起しているように大英帝国から独立を勝ちとったアメリカは、旧大陸で困難に直面しているイタリアのモデルになれるのである。フラーに、アメリカ人の特徴的な愛国主義が見られる。

I earnestly hope some expression of sympathy from my country toward Italy ... This cause is OURS, above all others; we ought to show that we feel it to be so. At present there is no likelihood.

Of war, but in case of it I trust the United States would not fail in some noble token of sympathy toward this country. The Soul of our Nation need not wait for its Government; these things are better done by the effort of individuals. (Fuller 1991: 160)

私は今日、わが国がイタリアに対して支持を表明することを心から願うものである。…この独立運動は、他の何にもまして、「われわれ自身のもの」である。われわれはその意志を示すべきである。現在そのような状況は全然ないが。

戦争については、一端火急あれば、合衆国はこの国に対して温情ある高潔さを見せることに憚ることはないであろう。アメリカ人の魂は政府の決断を待つ必要もなく、個人の奮闘によって良くなされている。

フラーは、修道院制度にも批判の目を向ける。ある日曜日、フラーはフェルレッチ枢機卿の執り行う修道女の叙任式に参列した。尼僧になるその娘は、貴族の生まれで優雅な女性であったが、俗世間で彼女を受け入れるところがなかったのである。その娘は祭壇に進むと膝まずいて祈りを捧げ、その間その聴罪司祭は、どの国のどの教会の説教師にも共通の、あのわざとらしい不自然に哀れっぽい調子で、娘の束縛された足取りを「栄光へと」導くことを自賛した。その後、その娘は格子戸の陰で髪を切られ尼僧の服に着がえさせら

れた。カラスの群れのように黒衣の修道女たちが集まり、不吉な祭礼を想わせた。その間、オルガンが初めは甘美で穏やかに、次に栄光へのよろこびを奏でた。しかし、この女性の将来を思うと、フラーの胸は張り裂けそうであった。貴族階層を維持するために、女性が独身のまま一生修道院で暮らすことを余儀なくされるという社会は、残酷なことにかわりはない。

フラーは、ジェスイット派が街角で、無知な庶民に対してまじないや奇跡や神の御告げと称して、教皇の改革路線を非難しているが、今や庶民も決してその策略にはのらないと付け加えている。1848年1月1日付けの記事でフラーは、『イル リソルジメント』紙を創刊したセザール・ガルボの両シチリア王への請願、ジョゼッペ・マッツィーニの教皇ピウス9世への書簡の英訳を掲載した。マッツィーニの書簡は1847年8月8日にロンドンで作成された後、11月25日パリで印刷され、アメリカの『トリビューン』紙上に載った。この時点で、この歴史的な文書が全文英訳されたのは、『トリビューン』紙が初めてであることに議論の余地はない。マッツィーニは、その書簡で「キリスト教を重んじる愛国者として、ヨーロッパの魂であるイタリア全土の統一を」と教皇に呼びかけた。マッツィーニが真に教皇の歓心を引こうとしたのかに関しては、後の検討課題とする。ここでは、教皇が「自分をナポレオンにしたがっている者がいる」と近習にもらし、焦燥感を募らせた逸話を記録しておく（ヒバート 1991: 337）。

## 5. 教皇の優柔不断—イタリア各地の紛争、メッテルニッヒの退位

クリストファー・ヒバートの『ローマ—ある町の伝記』(1991)によると、18世紀初頭のローマには一万人弱の聖職者、修道僧、修道女、それに役人、庶民、外国人が住んでいた。無数の人間がおびただしい数の教会や寺院や、劇場、病院などの公共の建物で、食事や寝台をあてがわれ、無為徒食の生活に甘んじていた。また、旅行者と巡礼者の数が、定住者の数を上まわるのもローマ市の特色であった。この頃までに、多くのキリスト教の儀式は土着化して、ローマ社会の温存してきた神々の祭りと融合し、一日おきに神々を称える祭式が行われた。フラーが滞在した19世紀半ばのローマでもこの慣習は続いていた。ともかくナポレオン時代の修道院の解散と財産没収によって、何千人もの修道士や修道女が修道院から追い出され、徴兵を受けた貴族の若者たちは逃亡し山賊の仲間入りをした者も少なくない。それやこれやの理由で、ローマ市内で生活に事欠く貧民の数は、1810年の1万2000から1812年には3万に増大したといわれている。フランス軍が撤退した後、ローマ市の人口は依然として約13万5千を超えるにすぎなかった。とはいえ、1840年代には、100万を超えるパリの人口を除いて10万以上の都市はリヨンなど3つしかないフランスに比べて、前近代的な人口集積の型ではあったが、イタリアではナポリが40万、ローマ、パレルモ、ミラノ、トリノが15万、ヴェニス、ジェノア、メッシナ、フローレンス、ボローニアが10万の人口を抱えていた。

フラーは、アラ・コリ教会におけるイエスの祭りなど数々の祭りを紹介しながら、レグ

ホーンやジェノアの暴動とローマ市民の対応を細かに報道した。この祭りはクリスマスの日から1月6日まで続き、マリアに抱かれた子供のイエス像を掲げ、司祭、名士、善男善女が教会の周囲を2回巡行する行事である。教会は大変混雑し祈りを捧げる貧しい人々もいるのだが、教皇を称える賛美歌とフランス革命歌のメロディと同じ「目覚めよ、イタリアの息子！」が歌われ、フラーの心は複雑な思いにかられていく。ここは、フラーの記事がニューヨーク・シティ・カトリック教会の司教ヒューズの怒りをかったところである。

How anyone can remain a Catholic --- I mean who has ever been aroused to think, and is not biased by the partialities of childish years --- after seeing Catholicism here in Italy I cannot conceive. There was ever a soul in the religion while the blood of its martyrs was yet fresh upon the ground, but that soul was always too much encumbered with the remains of Pagan habits and customs: that soul is quite fled elsewhere, and in the splendid catafalque, watched by so many white and red-robed, snuff-taking, sly-eyed men, would they let it be opened, nothing would be found but bones !

(Fuller 1991: 205)

どのようにして人はカトリック教徒でいられるのだろうか…少しでもものを考えることを喚起され、子供時代の愉しみにより偏見をもたずにいられたら、という意味である。イタリアでカトリック教の社会を見た後では、そう思わずにいられない。私はこの地が殉教者の血で染まったばかりであるその宗教に、かつてひとつの魂があったかと思わずにいられない。しかもその魂は常に異郷の習慣や慣習の残滓に妨げられる結果、魂は他所に霧散し、あの壮麗な霊柩台の中では、白と赤の礼服をつけ、噛みタバコを吸う、細い目の男たちに仰々しく護られて、仮に開けてみても、骨だけしか残っていないであろう！

1848年2月24日付けの『トリビュン』紙で、グリーリィはヨーロッパ特派員であるフラーが過激なプロテスタントであることは認めたが、もちろん、イエズ会がイタリア人民の自由を抑圧している責任があると付け加えた。

1848年3月18日、ミラノではタバコ暴動が発展し、ラデツキー将軍配下のオーストリア軍を公国から短期間、追い出して「栄光の5日間」を経験し、3月22日にはダニエーレ・マニン（Daniele Manin）とニコロ・トンマーゼオ（Niccolo Tommaseo 1802-1874）がヴェニス共和国樹立の宣言をしたというニュースが届く。また、シシリーでの反乱、ナポリの革命の気運も告げられる。ローマでは一週間続く謝肉祭の最後の夜、モコレッチ（moccoletti）と呼ばれる華燭の祭りが、コルソ通りに繰り広げられた。これは、手にしたろうそくをお互いに消しあう伝統的な祭りであった。肌寒い雨の日で、フラーは2階の

窓からショールをはおり、薄絹や花々で身を飾り仮面をつけた人々のパレードを眺めた。夜に入ると、行列のろうそくが小道に窓にベランダに動いて、コルソ通りに無数の大きなホタルが飛んでいるようであった。この年はジェスイット派の煽動を避けるために、民衆は穏やかに振る舞い9時には家路についたとフラーは伝えた。しかしストリー氏は、この年のモコレッチは「特別であった。イタリア軍の勝利の知らせが届くと、人々はろうそくを手にもコルソ通りに繰り出し、イタリアの歌を歌い歓呼の声がこだました」(Fuller 1991: 210) と記した。

その直後、フランスでルイ・フィリップ王の退陣をもたらした2月革命、そしてメッテルニヒ失脚の知らせが届く。フラーは、改めて時代が進展していくのを確信したようである。フラーはこの時点で、アメリカの読者に対して民主主義を、「友愛」「平等」という語句の他、初めて「労働者階級」という言葉を使用した。マルクスの『共産党宣言』(1848)は、わずか10日前の、3月18日に発表されている。フラーはこれらの議論をフランスの政治クラブで経験しているが、今のところ推察の域を出ないものの、『宣言』はマッツィーニから知らされたかもしれない。

To you, people of America, …… you may learn the real meaning of the words FRATERNITY, EQUALITY; you may, despite the apes of the Past, who strive to tutor you, learn the needs of a true Democracy. …… You may in time learn to reverence, learn to guard, the true aristocracy of a nation, the only really noble-- the LABORING CLASSES. (Fuler 1991: 211)

アメリカの人々よ、…あなた方はおそらく＜友愛＞、＜平等＞という言葉の真の意味を学ぶであろう。あなた方を訓育すべく心を砕いた人まね猿の仕業にも拘わらず、真の＜民主主義＞の必要性を学ぶであろう…国家の中で真の貴族である、唯一誠に高潔なく労働者階級＞を敬愛し護ることを学ぶだろう。

ミラノやヴェニスやモデナでオーストリア軍を追い散らし、3月22日国民軍を指揮したマニンが、セント・マルコ広場に共和制国家の旗を掲げたニュースで、ローマは沸きたった。2・3日の間、ローマの町では愛国者たちが火をふくような演説を人々に浴びせ、多くの若者たちはコロセウムで入隊手続きをとった。そして家族に見送られた軍隊は、ロンバルディアを目指して次々に行進していった。人々は義援金を集め、義勇兵になるものも多かった。兵たちの家族はポンテ・マルレまで軍隊について行き、母親や妻たちは涙を浮かべて別れた。イギリス人は、イタリア人の不慣れた軍隊行進の様子に、最初の30マイルも行進できないだろうと嘲笑した。教皇領からの軍隊は政府の援助も待てなかったので、一日目の夜はモンテ・ローズでの宿泊であったが、食物も寝る場所もなかった。しかし、キビタ・カステラーナでの2日目にはまだ元気一杯で、夜更けてからも広場で踊り『教皇、

万歳！』を叫んでいた。1848年4月19日の記事で、フラーはミラノ暫定政府のドイツへの声明を格調高く気品に満ちたものであるとして、英訳文を掲載している。

しかしローマ市民のよろこびは長くは続かない。3月23日、カルロ・アルベルト(Charles Albert)、サルディニア王はイタリアの解放を求めてオーストリアに対戦を宣言し、初めナポリや教皇領も含む、イタリア全土から義勇軍がピエドモント・サルディニア軍に合流した。しかしながら、4月29日、ピウス9世は教皇訓示<sup>アツロクツイオーネ</sup>をだし、オーストリアへの戦争を認めないと宣言する。ナポリ王のフェルディナンドは、この機会をとらえて即座に軍を退却させた。この戦争は、高い理想を求めるには戦闘の無能振りを発揮した上に、共和主義的革命派と君主たちの間に利害の衝突があり、ピエドモントがイタリア全土の開放をもたらすような責任感を持ち合わせていないことを暴露した。クストーザにおける小さい戦闘の敗北が無残な退却と挫折感をもたらした。停戦がサラスコで署名され、ロンバルディアは再びオーストリアに屈した。フラーは、カルロ・アルベルト、サルディニア王の失態、教皇の訓示の結果生まれた一般庶民の期待感と挫折、そして指導者の欠如を分析した。

However, the wounds were cruel enough. Roman volunteers received the astounding news that they were not to expect protection or countenance from their Prince; all the army stood aghast that they were no longer to fight in the name of Pio. It had been so dear, so sweet to love and reverence really the Head of their Church, so inspiring to find their religion for once in accordance with the aspiration of the soul. They were to be deprived, too, of the aid of the disciplined Neapolitan Troops and their artillery, on which they had counted. How cunningly all this was contrived to cause dissension and dismay may easily be seen. (Fuller 1991: 233)

しかしながら、人々に与えた心の痛手は十分すぎるほど残酷であった。ローマの義勇軍は教皇からの庇護や奨励を期待できないという驚くべきニュースを受け取った。もはやピウス9世の名の下に戦えないと分かって軍全体が仰天した。彼等にとって教会の首長を心から愛し敬愛することは、極めて貴重で甘美なことであった。特に魂の志と一致する宗教を見出すことは、大変刺激的であった。ローマ軍は頼りにしていた規律あるナポリ軍や大砲の救援を奪われることとなった。これらすべてが、不和の種や落胆の原因をもたらした抜け目ない策謀を生み出す原因になることは火を見るより明らかである。

教皇が中立を宣言したニュースが飛び込むや、ローマ市は騒然となった。共和主義者たちだけでなく、息子を義勇軍に出征させた親たちは、教皇の旗のもとに戦っていたと思わ

れた息子たちが、オーストリア軍に暴徒として射殺されるのではないかと怖れて、続々とコルソ通りに集まってきた。通りは午前10時には人々で一杯になり、午後にはローマ市の門を市民警備隊がかためた。ローマ市は5月2日まで落ち着きを取り戻せなかった。

フラーは、ナポリ軍の撤退と人民感情を正確に伝えている。ナポリ軍の撤退を拒絶した将軍ペペ (Guglielmo Pepe) は自分とともに残るよう軍隊に呼びかけた (Berkeley 2: 270, 284)。軍は動揺したが、所詮王の名の下に人民を犠牲にし、厚遇を受け浪費生活を送ってきた規律のない軍隊であった。彼等は困窮した人民が蜂起し権利のために戦う時、その人民を抑圧するかもしれなかった。したがって彼らの軍隊には、他の軍隊に比較し愛国主義的な感情はほとんど見られなかった。今回彼等に求められたのは、慣習に反して行動する高貴な義務感であった。逡巡した後、多くの兵士たちは王の命令に従い撤退した。彼等に多くの愛情と名誉の手向けを送ったローマの諸領では、彼らの退却に対し同じように強い嫌悪感と侮蔑を示すのに手ぬるくはなかった。多くの町では軍の退却に道を開けようとはしなかった。小さな村々でさえ、彼等に火や水を与えるのを嫌った。兵士たちは恥辱と憤怒に包まれた。一人の将校は堪えられず自殺した。兵士たちの無学な心の中に、他のイタリア諸州に対する憎悪が湧き上がった。特に、内乱の際に暴政の道具となる、自分たちの身分に、そしてそれはそのままローマ教皇に対する憎悪となった (Fuller 1991: 234)。

フラーは、サルディニア王カルロ・アルベルトの不甲斐なさをのろい、ミラノやヴェニスやシシリイの戦いを英雄的であると称揚した。とりわけフラーは教皇の無策と臆病を嘆いた。今回の教皇の訓示によりローマ市民は父親を失った。教皇自身は、政治指導者としての短い人生を終わらせたと解説した。

歴史的な視点から、バークレイ (G.F.H.Berkeley) のように教皇の立場に同情的な見方をするものも多い。すなわち、教皇の自由主義的改革がオーストリアとの衝突をもたらした原因でもあるのだが、ミラノの革命とカルロ・アルベルトの対オーストリア戦争は彼をジレンマにたてさせた。イタリアの君主として、ピウス9世はイタリア解放の戦争を指示しなければならない。その一方、ローマ・カトリック教会の長として、教皇は直接攻撃をされなければカトリック国家と戦争はできなかった。それにしても善意のローマ市民は、教皇が自由運動を最終的には放棄するだろうという見識を持ち合わせていなかった。その後ますます教皇は人民から離れていき、政治的判断を枢機卿会議に任せ、宮殿に引き籠もるようになった。

## 6. ロッシ暗殺と教皇のガエータ逃亡

1848年12月2日の特派員報告は多くの政治的な大事件に満ちている。社会不安を理由に大勢の外国人、主にイギリス人、ドイツ人、フランス人、ロシアの若い臣下たちがローマを去った。外国人相手に生計を営むローマ市民は困窮した。マミアーニ伯やファリッパ伯などの自由主義者が政府首班の任を辞任した後、ペッレグリーノ・ロッシ伯 (Pellegrino Rossi 1787-1848)<sup>5</sup> が首相となった。彼は、経済政策や開明的行政で教皇俗権の維持を決

意していたが、その高慢不遜で挑発的な性格から多くの敵があった。はじめフランスのフィリップ王治世下ギゾーに仕え、フランス大使として1845年ローマに任じられた。その後教皇と親しくなり顧問を務め、1848年9月首相となった。彼は戦争相ブッチをプロヴァンスに送り、ガルヴァルディの軍がボローニアに入るのを妨げた。また、フランスの南プロヴァンスから軍隊を召集し、下院の開会式に、ローマ市民警備隊の面前でプロヴァンス軍を閲兵した。新聞は検閲を受け、多くの人が突然逮捕され国外追放となった。人々の怒りは頂点に達し、コップの水はあふれたのであった。

フラーはこの頃、ローマのベルビーニ広場に面した大きなアパートに住んでいた。この部屋的一方からベルビーニ宮殿や教皇の宮殿の庭が見張らせた。ローマ市民は外国人によって裏切られたローマを見ることに憤りを感じていた。そんな矢先、美しく晴れた11月15日、散歩から帰ったフラーに、いつもの笑顔を少し曇らせて女主人のパドローナが言った。「首相のロッシが殺されたのをご存知でしたか?」「殺されたですって?」「ええ、後ろから一突きで。まったく悪い男ですよ。しかしそれがキリスト教徒を懲らしめるやり方でしょう?」「私は非業の死の知らせを聞いて喜ぶような人間では決してないが、ロッシの暗殺は<畏怖すべき正義が行なわれた暗殺>であると思われた」と、フラーは書いた。だが、それは一般市民の感情を代弁していた（ヒバート1985: 340）。

翌日ローマは沸き返った。武装集団が市街を行進してスローガンを叫び、暗殺者たちを称える歌を合唱した。兵士、警官、名士たちを含む大勢がキリナル宮殿に押し寄せ、民主的な政綱を要求した。そして教皇に譲歩の意思がないとわかると、彼らは宮殿を襲撃し、窓から銃撃し、扉に火を放とうとしてラテン語秘書官を殺害した。教皇は脅迫されてやむを得ないと抗議しながら、急進派に屈服して彼らに好意的な内閣の組閣に同意した。その後まもなく宮殿内で事実上、囚われの身である教皇は、大きなめがねをかけ顔を隠して一般聖職者に変装し、ローマを脱出しナポリ王国のガエータに逃亡した。そして狡猾な政治家である枢機卿アントネッリの助言によって反徒たちの降伏を要求した。

その後、帰国したマッツィーニは、名誉ローマ市民として迎えられた後、憲法制定議会の代議員選挙を行ない、1849年2月9日ローマ共和国を樹立した。三頭政治体制の主席となったマッツィーニは、イタリアの独立と統一を呼びかけるが、教皇を護るフランス軍の攻撃を受けることとなる。フラーは、マッツィーニの演説「神と人民と」、そして攻囲されたローマからフランス軍ウディノー將軍、レセップス將軍とローマ共和国側の書簡のやり取りを報道し、イタリアの統一運動リソルジメントを支持した。ローマ共和国が降伏しフランス軍が7月3日に入場してからも、フラーの筆の力は落ちなかった。最後まで、勇敢なガリヴァルディや若い学生軍、イタリア義勇兵の革命に対する純粋な情熱を称えた。教皇ピウス9世は、1850年4月、9ヶ月後にフランス軍に護衛されローマに戻った。

5 ベッレグリーノ・ロッシ 弁護士、教授、イタリアの政治亡命者としてフランスに帰化し、1845年ギゾーにイタリア大使に任命される。1848年9月16日ローマ教皇から首相に任じられる。頭の切れる政治家であったが、彼を高慢で政治的には退嬰的であるとする人々からは毛嫌いされた。



## むすび

マーガレット・フラーは、教皇ピウス9世に対し、宗教上は人民の精神的な指導者として、封建領主としては近代的な自由主義的な政策を望んだ。その結果、ピューリタンとしてのフラーは、位階制度を際立たせる豪華で壮麗な儀式に虚飾を感じ、封建領主に関してはその保守体制を批判せずにはいられなかった。フラーの根本的な思想原理である、超絶主義の依拠する自由主義的で合理主義な共和主義が、教皇の近世的な存在そのものに反撥したのである。従って、本来教皇が自由主義的な政策をとろうとも、フラーが教皇庁制度を否定する以上、ピウス9世は必然的に攻撃の対象から免れ得なかったのである。

歴史的な観点からすれば、1849年の教皇ピウス9世のガエータ逃亡は、教皇庁の宗教的な指導者と封建領主としての役割矛盾を暴露した事件であり、イタリアが近世から近代に移る痛みを伴う胎動のひとつであった。つまり、イタリア「近代化」の萌芽期の始まりだった。人民は教皇の不安定な政治的立場を認識し始め、イタリアの統一については、大方の中産階級は政治的経済的自由を求めて開明的な君主国を、少数の人間が共和国樹立に求め始めた時期であった。1848年ヨーロッパを揺るがした各地の革命では、自由主義思想の理想が、未だ勢力を存続させる旧体制の前に崩れていったが、フラーはアメリカの読者たちにイタリア統一運動の目標、＜自由主義＞と＜民族主義＞を広めることになった。フラーの特派員報告を編集したスーザン・ベラスコによれば、多数の亡命者や移民の住むニューヨークでは、『トリビューン紙』の売り出しを待って人々が販売所に群がったということである。

## 参考文献

- Berkeley, G. F. H. and J. (1968) *Italy in the Making: January 1st 1848 to November 6<sup>th</sup> 1848* Cambridge University Press
- Blanchard, Paula (1978) *Margaret Fuller: From Transcendental to Revolution* NY, Dell
- Capper, Charles (1977, 1992) *Margaret Fuller: An American Romantic Life* Oxford University Press
- Cassou, Jean (1939) *Quarante-huit Garimar* = ジャン・カスー：野沢協監訳 (1997) 『1848年—2月革命の精神史』法政大学出版局
- Chevigny, Bell Gale (1976, 1994) *The Woman and the Myth: Margaret Fuller's Life and Writings* Old Westbury, NY Feminist Press
- Emerson, Ralf Waldo: *Collected Works* ed. Joseph Slater (Cambridge, Mass: Belknap Press, 1983)
- (1960) 'Divinity School Address' *Selection from Ralf Waldo Emerson* Houghton Mifflin, Boston = エマソン, R.W. : 齊藤勇訳 (1987) 「神学部講義」『超絶主義』研究社
- エマソン, R. W. (1996) 『エマソン論文集』酒本雅之訳 岩波書店
- Fuller, Margaret ed. Emerson, Ralf Waldo, Clarke, James Freeman, and Channing, William Henry (1852) *Memoirs of Margaret Fuller Ossoli*, London: Richard Bentley
- *Journals* (Fuller Paper) Houghton Library, Harvard University \*未だ出版されず原稿のままハーバード大学ヒュートン図書館に保管されているもの。各年代をおって、箱、ファイルには Dr. Hudspeth 等による整理番号が記されている。

- (1983) *Letters*, 6 vols. ed. Hudspeth, Robert N., Ithaca, NY Cornell University Press
- (1991) *Summer on the Lakes in 1843* A prairie Book Series, Illinois University Press
- (1991) “*These Sad and Glorious Days: Dispatches from Europe, 1846-1850*” ed. Raynolds, Larry J. and Smith, Susan Belasuco New Haven, Conn., Yale University Press 本稿の特派員報告の文章は、これをテキストとし、引用文はすべて筆者が翻訳した。
- (1992, 1995) *The Essential Margaret Fuller* ed. Jeffrey Steele, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey
- (1994) *Woman in the Nineteenth Century and Other Writings* Oxford University Press, Oxford/New York, a World Classics Paperback
- (1994) *The Portable Margaret Fuller* ed. Mary Kelley, Viking Press
- Hibbert, Christopher *Rome: The Biography of a City*, Grafton Books London (1985) = クリストファー・ヒバート：横山徳爾訳 (1991) 『ローマ：ある町の伝記』朝日選書
- 黒須潤一郎 (1997) 『イタリア社会思想史』御茶の水書房
- Mehren, Joan Von (1994) *Minerva and Muse: A life of Margaret Fuller* University of Massachusetts
- Namier, Lewis *1848: The Revolution of the intellectuals* (Oxford University Press, 1946, 1992)
- Smith, Page (1990) *A People's History of Post Reconstruction Era*, vol.6, *The Rise of Industrial America* Penguin Books
- Thoreau, H. D. (1987) *Portable Thoreau*, Bode, Carl ed. Viking Press
- 上野和子 (1997) 「インディアン問題：超絶主義的アプローチ：Margaret Fuller: *Summer on the lakes, 1843* (1991) の再版に際して」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』19号
- (1998) 「マーガレット・フラー：イタリア・リソルジメントへの軌跡 (1) アメリカ奴隷制廃止運動と穀物法廃止」『学苑』698号
- (1998) 「マーガレット・フラー：イタリア・リソルジメントへの軌跡 (2) 二月革命前夜のフランス」『学苑』701号
- (1999) 「マーガレット・フラー：イタリア・リソルジメントへの軌跡 (3) マーガレット・フラーとジョルジュ・サンド」『学苑』709号
- (2003) 「マーガレット・フラーの女性解放論『19世紀の女性』」『行動するフェミニズム』新水社

(うえの かずこ 人間文化学科教授)